



TITLE:

京大広報 No. 617

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 617. 京大広報 2006, 617: 2255-2270

ISSUE DATE:

2006-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196474>

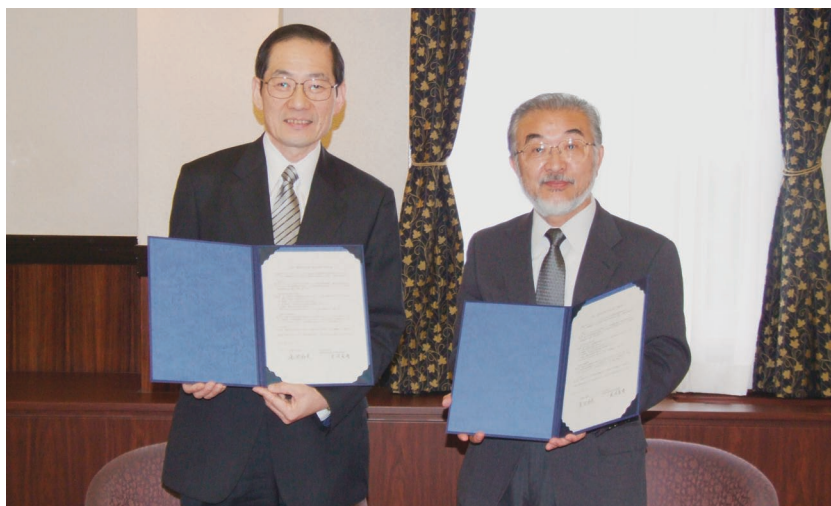
RIGHT:



京大広報

No. 617

2006.11



包括協定を締結後の尾池総長と米倉放医研理事長
—関連記事 本文2258ページ—

目次

「京都大学女性研究者支援センター」の発足にあたって 女性研究者支援センター長 塩田浩平……	2256
〈大学の動き〉	
放射線医学総合研究所と研究・教育・医療の 包括協定を締結……	2258
文部科学省 平成18年度「タンパク質解析基盤 技術開発」の採択結果 ……	2258
NEDO技術開発機構 平成18年度第2回産業 技術研究助成事業の採択結果……	2258
部局長の交替等……	2258
〈部局の動き〉	
ナノメディシン融合教育ユニット平成17年度 履修生の修了式を挙行……	2259
国際融合創造センター「NEDO光集積ラボラトリー」 の新設……	2259
〈寸言〉	
プラス思考 辻井昭雄……	2260
〈洛書〉	
余計なお世話 初宿正典……	2261
〈随想〉	
ホワイトヘッド生命体哲学をめぐって 名誉教授 荒牧典俊……	2262

〈話題〉	
将棋部が毎日杯争奪第2回全国大学対抗将棋大会 で優勝……	2263
第2回「ノートテイク」養成講習会の開催 ……	2264
女性研究者支援センター設立記念シンポジウムの 開催……	2264
宇治キャンパス公開2006を開催……	2265
看護フェアを開催……	2265
「国際化と日本人のアイデンティティ —分析心理学の視点から—」を開催 ……	2266
「アトムサイエンスフェア2006」を開催……	2266
〈計報〉……	2267
〈日誌〉……	2267
〈お知らせ〉	
湯川秀樹・朝永振一郎博士生誕百年関連展示 「一中・三高・京大—二人が学んだ学校—」…	2268
知的財産・産学官連携説明会……	2268
能楽鑑賞会……	2269
化学研究所 第106回研究発表会 ……	2270
〈編集後記〉……	2270

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

「京都大学女性研究者支援センター」の発足にあたって

女性研究者支援センター長(医学研究科教授)

塩田 浩平

女性研究者の包括的支援「京都大学モデル」

京都大学はこれまで卓越した研究を行い、多くの人材を輩出してきましたが、21世紀にさらに大きく飛躍するためには、次代を担う若手研究者の育成と女性研究者の活躍が不可欠です。京都大学における女性研究者の割合は、他大学等に比べて低く、教員全体に占める女性の比率は7.2%にすぎません。しかし、課程博士学位取得者のうち女性の割合は現在21%に達し、また大学院生全体の約4分の1を女性が占めています。このことは、女性教員の数も今後目立って伸びてくることを予想させます。しかし、実際に女性が研究生活を続けようとする様々な困難に直面し、特に出産、育児、介護等のため、研究を中断せざるを得ないケースも少なくありません。京都大学では、女性研究者が十分に能力を発揮して活躍し、また高いポテンシャルをもつ若い女性が研究者の道に進むことを全学的に支援するために「女性研究者の包括的支援「京都大学モデル」」計画を立ち上げ、これが平成18年度の科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル事業」に採択されました。この資金と学内経費を得て、後述のようないくつかの事業を推進することになっています。また、それらの事業推進のために本年9月5日に「京都大学女性研究者支援センター」(ホームページURL <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)が設立され、活動を始めました。京都大学構成員の皆様方の御理解と積極的



な御支援をお願いする次第です。

京都大学における女性研究者の活動

京都大学における女性研究者の割合は全国的に見ても低いのですが、女性

研究者のネットワーク作りや組織的な活動には、かなり長い歴史があります。こうした活動について稲葉カヨ生命科学研究科教授(女性研究者支援センター「京都大学モデル」推進室長)が京大広報No. 614(2006年7月)「洛書」に書いておられますが、古くは1963年に、京都大学的女子大学院生を中心に自宅での共同保育が開始され、これが後に「朱い実保育園」(現在は京都市の認可保育所)に発展しました。翌1964年には、女子学生・院生が協力し合って、女性研究者が抱える問題を解決する目的で「京都婦人研究者連絡会」が結成されましたが、この活動はその後全国に広がり、現在は「女性研究者の会」として、日本学術会議や日本科学者会議と協調して様々な活動を行い、女性研究者の交流を支援しています。さらに、女性教員の地位向上や性差別撤廃に取り組むために「京都大学女性教員懇話会」(現「京都大学女性教員懇話会」)が1981年に結成され、これはこの種の団体としては全国の先駆けとなりました。2005年7月には総長主導のもとに男女共同参画企画推進委員会が作られ、京都大学における男女共同参画の基本理念と基本方針が制定されました。また、1980年代以降の女性学やジェンダー研究に主導的な役割を果たした研究者も、京都大学には少なくありません。

こうした歴史と実績の上に、京都大学の女性研究者が今後ますます増加し、十分な能力を発揮していただくために、「京都大学女性研究者支援センター」では当面、次のような事業を計画しています。これらの事業推進の支援をするため、センターに「支援室」をおき、専任の特任教授(登谷美穂子氏)とスタッフ2名を配置しました。そして、図1にある5つのワーキンググループ(WG)がそれぞれの事業に取り組むことになっています。なお、センターの活動については、全学の「男女共同参画企画推進委員会」ならびに「人権委員会」等とも密接な連携をとりながら進めていきます。

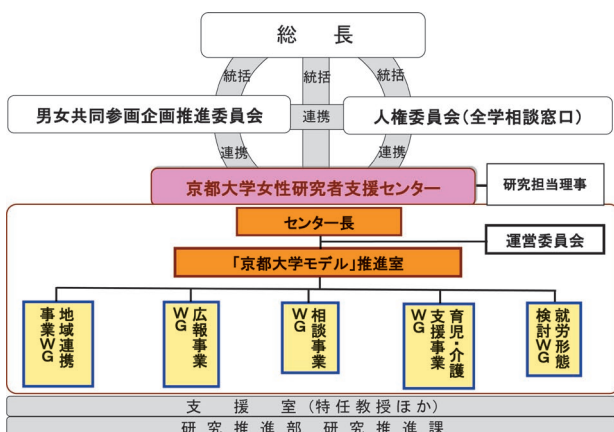


図1 組織図

「京都大学モデル」の事業計画(図2)

(1)「交流・啓発・広報」事業

女性研究者同士が交流して情報や意見を交換し、また世代を超えた交流を支援するために、女性教員・大学院生・学部学生が交流できる機会を提供します。また、長期的視野で女子学生・女性研究者の数を増加させるための啓発活動として、京都府・京都市との連携のもとで、女性教員を中心に小・中・高校への出前講義を行い、また、夏休みのサマースチューデントなどとして受入れ京大の研究活動に触れていただくことを計画しています。

さらに、WGが中心となって女性研究者支援のための啓発・広報活動を学内外に対して行います。具体的には、①女性研究者・女子学生の現状や動向に関する調査と分析、②広報誌や京大ホームページを通じた情報提供と啓発、③女性研究者を取り巻く問題点についての講演会やシンポジウムの開催、などを予定しています。こうした活動は、女性研究者自身に対してのみならず、それを取り巻く男性研究者や学生に対しても等しく重要なものと考えています。

(2)「相談・助言」事業

女性研究者が抱える最大の悩みは、自らのキャリアを男性と対等に形成して向上させようとする際に、女性固有といってよい様々な問題に直面することです。妊娠・出産・育児・介護などの負担に加え、ハラスメントなどの問題の当事者となることも少なくありません。

センターでは、女性研究者が抱える問題に関する相談に応じ、可能な範囲で解決を支援するために、女性研究者に対する相談窓口を設けます。当面は週1回、京都市と(財)京都市女性協会(ウィングス京都)から女性カウンセラーの派遣を受けて、専門的立場からの相談とカウンセリングを行っています。

また、若い女性研究者や大学院生に対して研究者固有の問題に対する相談や助言、ロールモデルの提示を行う目的で、女性研究者メンター制度を発足させ、先輩女性研究者と個別に相談できるような制度を設けることを計画しています。

(3)「育児・介護支援」事業

女性研究者にとって特に負担が大きい育児を支援するために、附属病院内に患児保育施設を設け、看護師と保育士を配置します。これは、急な病気のため保育園や小学校に行けない子供を早朝から夕方ま

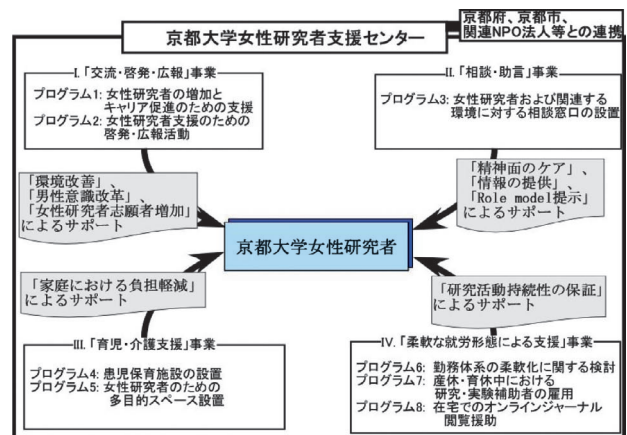


図2 京都大学モデル

で、施設内で保育するものです。受益者負担で有料となりますが、子供の急な発病で研究を休まざるを得ない状況を少しでも軽減するための事業です。開設は2007年1月の予定で、附属病院スタッフの全面的な協力の下に進められます。

なお、近い将来、女性研究者の情報交換や会議、資料室などを視野に入れた多目的スペースをキャンパス内に設置する予定です。

(4)「柔軟な就労形態による支援」事業

妊娠・出産・育児・介護などの際にも女性研究者ができるだけ研究を継続できる環境を保証するため、いくつかの支援策を検討しています。例えば、産休・育休・介護等の期間に必要な研究・実験補助者を雇用する場合にその給料を補助することや、在宅でも研究に関する情報収集などができるよう環境を整備することなどです。なお、勤務時間や勤務日数をフレキシブルに運用できるような制度の導入についても、その可能性の検討を進めることになっています。

本事業は、「包括的」という名前が示すように、多方面との連携が特に重要であり、現在も多くの方々にご協力をいただいております。また、女性研究者の皆様の積極的な参加も重要です。引き続き、本事業への御理解・御協力いただきますとともに、「京都大学モデル」が文字通り全国のモデルとなるように実績を挙げて発展し、京都大学の女性研究者がより一層輝いて活躍される環境をセンターとして提供できれば幸いです。

大学の動き

放射線医学総合研究所と研究・教育・医療の包括協定を締結

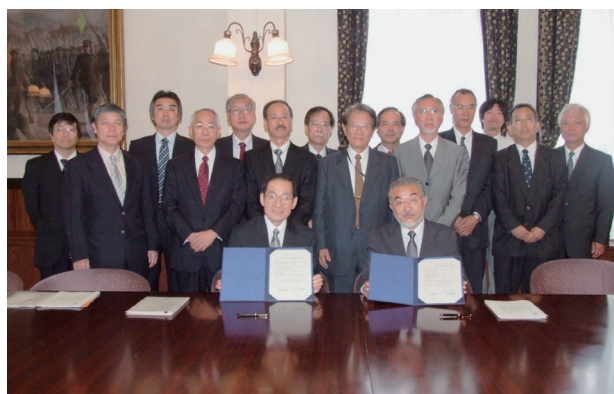
本学は、研究・教育・医療などについて、放射線科学領域において世界をリードし、併せて高度で優れた専門的人材の育成を行い、当該領域に対する社会のニーズに応えるべく、活動を連携して推進することを目的として、10月2日(月)に独立行政法人放射線医学総合研究所(放医研)と包括的な協力協定を締結した。

本協定は放射線科学で幅広い研究を進める京都大学と、放射線防護、緊急被ばく医療、重粒子線がん治療、分子イメージングなどで放射線と人の健康にかかわる研究で実績のある放医研が、研究・教育・医療の分野で密接な協力体制を構築することにより、国際競争力を高め、世界的な放射線科学領域の研究拠点形成を目指すものである。

連携協力の範囲は、基礎研究の基盤強化や人材育成、さらなる共同研究の推進、教職員・学生・研究生らの交流、施設・設備の共同利用などを含む。

時計台記念館迎賓室で同日、尾池和夫総長と米倉義晴放医研理事長が協定書を交わし、その後記者発表が行われた。協定期間は平成22年3月末まで。

(大学院医学研究科)



尾池総長と米倉理事長を囲む関係者

文部科学省 平成18年度「タンパク質解析基盤技術開発」の採択結果

領 域	研 究 課 題 名	代表機関・研究者氏名
制 御	ファーマコゲノミクス・ケモゲノミクス創薬コアラボの基盤整備	京都大学 薬学研究科長・教授 富岡 清
解 析	高難度タンパク質をターゲットとした放射光X線結晶構造解析技術の開発	高エネルギー加速器研究機構 参画機関：京都大学 理学研究科 教授 三木 邦夫

NEDO技術開発機構 平成18年度第2回産業技術研究助成事業の採択結果

分 野	研 究 課 題 名	研究者氏名
ライフサイエンス	植物病原菌のミュータント解析による感染機構阻害剤の低コスト・ハイスループット型スクリーニングシステムの開発	農学研究科 講 師 高野 義孝
革新的融合	プラズマ集合体とマイクロ波・ミリ波の相互作用場による新規機能発現及び通信デバイス・製造プロセス応用	工学研究科 講 師 酒井 道
産業技術に関する社会科学	系列型ネットワークにおける中核的研究所のエコシステム形成効果と知識移転マネジメント	経済学研究科 助教授 梶山 泰生

部局長の交替等

大学文書館長(再任)

藤井讓治文学研究科教授(歴史文化学専攻日本史学講座(日本近世・近代史))が11月1日付けで大学文書館長に再任された。任期は平成20年10月31日まで。

部局の動き

ナノメディシン融合教育ユニット平成17年度履修生の修了式を挙行

平成17年度文部科学省科学技術振興調整費による新興分野人材養成プログラムの一つとして発足した「ナノメディシン融合教育ユニット」は、平成17年度履修生の修了式を、9月26日(火)に芝蘭会館で行った。

本教育プログラムは、ナノテクノロジーとライフサイエンスの異分野融合により初めて実現できる、「ナノメディシン」という高度先端医療に関する基礎・応用研究を開拓できる研究者・技術者を育成することを目的としている。

平成17年5月から、医学研究科・工学研究科・再生医科学研究所が連携し、医学部保健学科の協力を得て、教育組織やカリキュラムの整備を行い、10月から第1期の履修生を受け入れ、バイオナノマテリアルコース、ナノデバイスコース、生体イメージング・ターゲティングコース、生体機能シミュレーションコースの4コースで教育を実施してきた。本教育プログラムがあらかじめ定めた基礎科目、発展科目、

実習、課題解決実習を1年間で履修した社会人履修生26人(延べ31人)、大学院履修生2人(修士課程1人、博士課程1人)がこの9月末でもって修了した。

修了式では、松重和美副学長(同ユニット代表)ほか関係部局長から祝辞があり、平岡真寛ユニット長より修了生一人ひとりに修了認定書が授与された。

(大学院工学研究科)



関係教員と修了生のみなさん

国際融合創造センター「NEDO 光集積ラボラトリー」の新設

6月1日、国際融合創造センター(IIC)に「NEDO光集積ラボラトリー」が設置され、「ナノガラス技術、三次元光デバイス製造技術等に関する研究開発の総合的展開」を実施していく。概要は以下のとおり。

1. 部 局 名 国際融合創造センター
2. 名 称 NEDO光集積ラボラトリー
(Integrated Photonics Laboratory)
3. 委 託 者 独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)
4. 設置期間 平成18年6月1日～
(NEDOプロジェクト期間と連動)
5. 代 表 者 牧野 圭祐 センター長
総括責任者 平尾 一之 大学院工学研究科教授
業務管理補助者 藤田 静雄 創造部門教授
担当教員 下間 靖彦 産学官連携助教授
小山 幸典 産学官連携助手
兼平 真悟 産学官連携助手
6. 実施目的 NEDOナノガラス技術プロジェクトにおいて蓄積された種々の光集積技術の普及・発展を図るとともに、この分野の関連技術や派生する課題の研究を行い、人材の育成につとめ、わが国の産業競争力の強化に資する。
7. 実施内容 ・光集積技術およびフェムト秒レーザー技術の周辺研究
・セミナーや講演会を通じての人材育成および研究ネットワークの構築
8. 具体的課題 ・光と物質の相互作用によるナノ構造形成メカニズムの解明
・フェムト秒レーザー技術による新規材料創製研究
・ナノガラス技術、三次元光デバイス製造技術等に関する人材育成
・ナノテク材料を対象とした分析・測定技術および計算科学の利用に関するセミナーの開催ならびに人的交流の促進
(国際融合創造センター)

寸言

プラス思考

辻井 昭雄



先日、親しい新聞記者がぼつぼつ人生を振り返ってみたらどうかと言った。そう言われてみれば、今年は卒業後50年にあたり、これを記念して先般京大会館で昭和31年経済学部卒の同窓生懇親会を開いたところだ。因みに、会館の経営者はわが社のグループ会社である都ホテルチェーンの元役員で本校の卒業生でもある。大学の依頼もあって推薦した。現在、会館の収支を改善するため腐心しているところなので、皆さん方にも精々ご利用いただくようお願いする次第である。

私は学生時代からどちらかというと引っ込み思案型だったが、会社に入ってからすぐに運輸の現場に配属され、大いに鍛えられたこともあって、控えめの姿勢が一変した。もともと、本質的には出しゃばりだったのかも知れないが、会議に出れば最初に手を挙げるし、講演会に出席すれば必ず質問をするといった具合である。その後、管理職に昇進し「明るい職場で楽しく働こう」などと格好いいスローガンを掲げて、部下を指導し、その意義を会社内外に宣伝していた。その時、明るい職場を実現するのは会社や管理者の役目だが、楽しく働くのは働く者自身の問題であり、そのモチベーションはプラス思考だと悟った次第である。プラス思考とは、物事は自分の主張する通りに実現できると確信して、明日を思い煩うことなく楽観的に、前向きに実行することである。もともと職場では楽しく働ける仕事など極めて稀で、多くは辛くて難しいものだが、そのしんどい仕事を楽しいものに転換できればやり甲斐のある職場生活が送れるはずである。転換するためには様々な工夫を要するが、転換を推進する原動力はプラス思考だと思う。そもそもしんどいと感じるのは現象の一面だけを見ているから起こるものだ。

従って、プラス思考の第一要件は物事を多面的に見ることである。そうすれば良い点も悪い点も見えるはずで、良い点を強調し、悪い点をネグレクトすればよい。部下の指導でも同じことで、部下の長所を見つけて伸ばしてやり、短所をネグレクトするか修正してやれば部下は育つものなのである。次に、第二の要件は準備を充分整えることだ。私はこれまでに数々の労使交渉をこなし、また厳しい経営環境のもとで株主総会を乗り切ってきたが、これは最悪の事態を想定して質問を設定し、その答案を準備してきたからである。答案は、まず資料・情報の収集に万全を期すること。次に専門家の意見を聞くこと。そして最後に侃侃諤諤の議論を尽くすこと。以上三つの手続を踏んだ上で、筋の通った論理的な物語を創作することによって完成する。それと共に、その物語を武器にして相手を説得する訳だが、そのためのプレゼンテーションを繰り返し練っておくこともまた不可欠の要件である。そして全般を通じて、見解や意見は伝聞でなく、あくまで事実にもとずいて述べなければならない。さらに、プラス思考の第三の要件は論理と表現力を確立した後は開き直すことである。世の中には「幽霊の正体みたり枯れ尾花」というように、実際に会ってみればそれほど恐ろしくもないのに、妄想をたくましくして気に病むことが多い。現実間違いなく『案ずるより産むが易し』なのだ。私もこれまで産むほうが難しかった経験がない。そこでプラス思考をまとめてみれば「準備は悲観的に整え、実行に際しては楽観的に行う」ということになる。

ところで、我々世代はいよいよ老境に入る。四苦は生老病死を指すように、生きていること自体が難しくしんどいものである。その上、間違いなく年をとり老いてゆく。病気にもなる。そして、やがて死を迎えるわけだが、その事態に備えてどんな準備が出来るか、また人間だから当然だと開き直れるか、人生最後のプラス思考こそ最大の課題である。

(つじい あきお 近畿日本鉄道株式会社会長、昭和31年経済学部卒)

洛書

余計なお世話

初宿 正典

平成17年4月から「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」が施行されたことに伴い、本学もこの法律の下で、保有個人情報の開示請求等に対応することとなり、個人情報保護専門委員会委員長という役目を仰せつかって約1年半になる。



ところで、《個人情報》という語は、《プライバシー》という語よりも広く、たとえば氏名とか容貌のように、個人情報ではあってもそのままではプライバシーとはいえないものも含んでいる。そして後者のプライバシーに関していえば、元来はアメリカ法において、「ひとりではうっておいてもらう権利」として生成発展してきたものであるが、この定義では、例えば夫婦が子どもをつくるかどうかを決めるのもプライバシーだということになってしまい、これでは広きに失するとして、現在では、プライバシーの権利を、自己の存在に関わる情報をコントロールする権利として構成する見解が有力となっている。いやしくも裁判で争って救済を求めうる権利として構成する場合には、権利の内実は明確なものであるべきだし、上に例を挙げた夫婦の問題などは、むしろ《自己決定権》の問題として考えるべきだということになる。

もっとも、《プライバシー》の権利についても、そこまで狭く解するのではなく、いわば「静穏のプライバシー権」というべきものもこれに含めて観念する見解もあり、筆者は、個人的にはこうした理解にも大いに親しみを感じるところがある。というのも、この頃とみに、JRなどの交通機関や駅のホームでの騒音が耳障りで仕方がないからだ。

たいていの人が日ごろ経験ずみのことだと思うが、駅のホームで電車を待っていると、「次に三番線に到着します列車は何時何分のどこどこ行きで、……」と言う具合に、テープに予め録音された定番のアナウンスが自動的に流れてくる。こんなアナウンスさ

えも、ヨーロッパなどではほとんどありえないことで、電車は発車を告げるベルさえならず、静かに発車するのが普通だ。しかしまあ、これぐらいは日本の「慣習」として仕方がないでしょう。ところが、発車直後には今度は駅員が畳み掛けるように、先ほどのとほとんど同じアナウンスを繰り返す。ときには、テープでのアナウンスの前にこれがなされることもあるから、そうなれば、乗客はせいぜい数分の間に、二度も三度も同じことを耳にしなくてはならない。しかも、通勤時間帯の各停の車中で停車駅が列挙されるばかりか、各駅から発車した直後と次の駅に着く直前にも駅名の放送が繰り返される。まあ、何とうるさいことか！そればかりか、ホームに電車が入線してくる直前には、これを知らせるための大変に耳障りな金属音が響き、さらに「危険ですから白線の内側まで下がってお待ちください」だの、「下りられる方を先にお通しください」だの、「先の方から順序よくお乗りください」などとかいった「ご注意」までしてくれる。新幹線も同様だ。電車が近く前に、繰り返し繰り返し同様のアナウンスが繰り返される上に、プルルル……という、きわめて耳障りな警告音が、列車がホームに入ってくるまで長い間、ずうっと鳴り続けている。

筆者と同じ不満を抱いている人も決して少なくないと確信するが、作家の五木寛之が「自己責任は可能か」という観点から筆者と同じ感慨を書いている（『こころの天気図』（講談社、2000年刊、52～53頁）のを読んで、さらに意を強くしたものである。

公共交通機関において目の不自由な人や老人等への配慮が必要なことは分かる。しかし過度の配慮は無配慮に等しい。少なくとも、大抵の乗客が通勤通学に利用するラッシュアワーの路線・時間帯では、静かなのが最善なのであって（そうでなくとも携帯電話やヘッドホンが耳障りなのに！）、駅や車内での日常的な《騒音》の洪水は、サービスという名のお節介以外の何ものでもない。思い切っていえば、こういう放送は殆ど不要であり、害悪でさえあると思う。「とらわれの聴衆」の立場から早く脱却したいものだ。

（しやけ まさのり 法学研究科教授、専門は憲法学）

随想

ホワイトヘッド生命体哲学をめぐって

名誉教授 荒牧 典俊

あの頃(1955年)、京大へ入学したばかりの新入生は、現在の宇治キャンパスにあった教養部分校で一年間を過ごすことになっていた。わたくしは、まだドイツ語が読めなかったから、とにかく英語で本物の哲学の原書を読みたいと考えて、分校の図書室で、あれこれ探し回った。ついに「ホワイトヘッド哲学にしよう、それは数学・物理学の根本問題をも思惟しぬいた哲学であり、何よりも英語が美しい」と考えて、“Science and the Modern World”から読み始めた。WordsworthやShelleyなどの詩が引用されていて難解な箇所については、当時、教養部で教えておられた上田泰治・村上至孝両先生による名訳があって参照することができた。最先端の数学者でもあり物理学者でもあったホワイトヘッドの、他方で芸術や宗教の深奥をもみせてくれる美しい哲学に感動して、つぎに、かれの主著“Process and Reality”に挑戦した。本部キャンパスにあった文学部哲学科閲覧室まで出かけて行って、ずしりと重い原書を借用して読みはじめた。学校の本であったから、ノートを取りながら読んで行って、二回生の夏休みも終りに近い頃、附属図書館で読み終えたことを記憶している。

それ以後、そろそろサンスクリット・チベット語などの学習、インド哲学や佛教学の専門の勉強が忙しくなってきたし、またドイツ語が読めるようになったから、ハイデgger哲学を読むことに専念するようになった。そちらの方は、ホワイトヘッドの英語表現をつかって英語を書く練習をしたり、英語の勉強をかねて断続的に“Adventures of Ideas”を読み散らす程度になってしまった。1972年、わたくし



自身が教養部で東洋社会思想史を担当することになって帰ってきたとき、当時、日本ホワイトヘッド哲学会の会長をしておられた山本誠作先生が同僚におられ、ホワイトヘッド哲学について親しく話し合う機会をいただいたこともあったが、もはや本格的に勉強することもないまま定年退職し、現在、大谷大学で佛教学を教えている。

ところが2004年春になって突然、日本ホワイトヘッド哲学会理事の方から電話があって、その年の大会で講演をしないか、とお誘いいただいた(きっと山本先生の御推挽だと感謝している)。このような好機は、二度とあるまい、これを逃したら長年、親しんできたホワイトヘッド哲学について深く思惟することなく了ってしまう、と考えて引受けさせていただいた。その年の夏休みは、集中して“Science and the Modern World”と“Adventures of Ideas”を、あらためて通読しながら思惟し、“Process and Reality”は必要なところを選んで読みなおして思惟し、英文で“A Critique of Whiteheadian Philosophy of Organism—in the Light of Buddhist Distinction of Two Truths”なる草稿をこしらえておいて日本語で講演させていただいた。幸い好意的に受け入れていただいたようで、会員のおひとりから、2006年7月にオーストリアのザルツブルクで開催される国際ホワイトヘッド哲学会で発表するように勧めていただいた。こんな機会も二度とあるまいし、現代の生命科学の全盛期に、もともと相対性理論と量子力学を融合する哲学として構想されたホワイトヘッドの生命体哲学が、はたして生命科学を根拠づける哲学へと展開しつつあるか、どのように最新の生命科学の成果をとり入れつつあるか、をも知りたいと考えて、こちらの方へも出席することにした。

主としてホワイトヘッドの生命体の哲学からして、現代の生命起源論及び進化論を解釈しなおし新しい道を切り開こうとする部会に坐っていて、研究発表を聴いていたのだが、だんだん、根本的に間違

っているのではないかと、思われてきて手をあげて発言した「有機化学的にあれ、あるいは量子化学を動員してまで物質的エネルギーから生命の起源や進化のプロセスを解明しようとおられるが、東洋の哲学は、反対に、いまここに生きている生命そのものを禪定思惟の道によって直接体験し、それが生命全体と一つにコミュニケーションしあっているところから出発して、どのように個別の生命体になっていくか、を思惟する、いわば、生命から生命体を介

して物質の由来を説明しようとしている。生物学者にとってすら、いまここに生きている生命こそが、根源的事実ではないか」と。わたくし自身の研究発表も、ホワイトヘッドの生命体の哲学に、いまここに生きている生命そのもの即ち生命全体という原理—それを佛教では「空性」「法界」などとよぶ—を導入することを提案しようとしたものであった。

(あらまき のりとし 元人文科学研究所教授
平成12年退官、専門は仏教学)

話題

将棋部が毎日杯争奪第2回全国大学対抗将棋大会で優勝

将棋部が8月7日(月)～9日(水)の3日間にわたって神奈川県箱根町の「ホテル南風荘」で行われた毎日杯争奪第2回全国大学対抗将棋大会で優勝した。

同大会は5人制の団体戦で囲碁や将棋の普及を目指す「盤樹の森」大会の一環として昨年はじめて開催された待望の夏の全国大会である。昨年は3位であったため、「今年こそは」という意気込みで出場。全国の強豪校を相手に苦戦を強いられたものの粘り強く戦い、昨年度優勝の東京大学や立命館大学との直接対決を制し9戦全勝で優勝となり、カヤの木の優勝トロフィーを関西に運ぶことができた。登録メン

バーは第59回アマ名人の浅田拓史(法)や今大会大将の小野友慈(農)をはじめ加藤悠吾(理)、高橋俊次(文)、上田哲史(経)、栗辻 悠(法)、谷口善紀(工)、守屋孝平(理)の8人。

現在、将棋部は毎年12月に行われる王座戦に向けて日々、切磋琢磨している。王座戦は大学棋界の最高峰の大会として位置づけられており、各地区、各大学のプライドをかけた白熱した戦いが繰り広げられる。京都大学は平成2年以降、優勝から遠ざかっており、王座戦優勝が将棋部の第一の目標である。

(将棋部)

第2回「ノートテイク」養成講習会の開催

共通教育推進部では、10月6日(金)18時から吉田南1号館において、4月11日に続き第2回「ノートテイク」養成講習会(初心者向け)を開催した。

この講習会は、聴覚障害を持つ学生の授業支援等のため、京都大学ホームページやKULASIS(京都大学全学共通教育教務情報システム)で協力者を募り、参加を呼びかけたものである。

ノートテイクとは、講義の音声や教室の出来事等を、聴覚障害者へリアルタイムに文字で伝える情報伝達方法で、「文字による通訳」といわれている。

講習会は、京都市要約筆記サークル「かたつむり」の吉田博美、市井秀子の両氏を講師に招き、ノートテイクの心得の説明から実践にいたるまで幅広い内容で行われた。参加者は、ノートテイクの実務を文字の大きさ、重要部分の例示、利用学生との約束事などを様々な事例で学ぶとともに、ノートテイクの役割や難しさを体験した。

参加者は20人強と、前回に比べ少なかったが、予定時間を超えて熱心に受講した。参加者の熱意を基に、障害学生への組織的支援体制の確立に向けた取

り組みへの発展が期待される。

今後も定期的に講習会を開催し、参加を呼びかける予定である。今回、支援を申し出られた多くの参加者に感謝すると共に、今後とも一層の協力をお願いしたい。

(ノートテイクについての問い合わせ先；共通教育推進課企画・調整グループ TEL 753-9348)

(共通教育推進部)



講習会でのノートテイクの様子

女性研究者支援センター設立記念シンポジウムの開催

10月9日(月・祝)、時計台記念館国際交流ホールにおいて「京都大学女性研究者支援センター設立記念シンポジウム」が開催され、100人を超える学内外の研究者、市民が参加した。科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムに「女性研究者の包括的支援「京都大学モデル」」が採択されたのを契機に、本学では、女性研究者の支援を目的として、京都府、京都市など地域との連携のもとに、育児と研究の両立支援、相談事業などの実施をめざして、女性研究者支援センターを設置した。本シンポジウムは、同センターの設置を記念するとともに、今後の方向性を議論するために企画されたものである。

当日は、尾池和夫総長、小石原範和京都府副知事、星川茂一京都市副市長の挨拶とともに、来賓の文部科学省科学技術・学術政策局、内閣府男女共同参画局から挨拶があり、その後、名取はにわ早稲田大学客員教授(前内閣府男女共同参画局長)の基調講演、同センター「京都大学モデル」推進室長の稲葉カヨ生

命科学研究科教授の講演に続いて、オムロン株式会社や京都府、京都市の男女共同参画担当者をまじえたパネルディスカッションが行われた。会場からの質問や意見も活発に出され、同センターに対する期待の強さが感じられたシンポジウムであった。

(研究推進部)



京都府、京都市、オムロン株式会社の担当者をまじえたパネルディスカッション

宇治キャンパス公開2006を開催

今年で10回目となる「京都大学宇治キャンパス公開2006」は、10月14日(土)、15日(日)に開催された。

当日は、晴天にも恵まれて2日間で約700人の参加者を得た。また、宇治川オープンラボラトリー会場(伏見区横大路下三栖)へは、宇治キャンパスから5往復のシャトルバスを用いて、約170人が見学をした。

今回は「社会の持続的発展を目指した先端科学の融合」を統一テーマに、各研究所等の研究活動を一覧できる総合展示、公開ラボ、公開講演会を実施した。

総合展示では、パネルにそって各研究所等から参加者に詳細な説明が行われた。公開ラボでは、今年新築されたエコ木造実験住宅が紹介された。国産の木材を使用し日本の伝統的工法を参考に建てられ、床下ではシロアリの実験も進行中であるとの説明に多くの参加者が耳を傾けていた。その他、参加者自ら体験できる実験を通じて、楽しみながら先端科学の研究にふれていた。また公開講演会では、「太るメカニズム、やせるメカニズム：生活習慣病との深い

かかわり」、「オフィスのエネルギー環境とオフィス作業の生産性」、「地球を愛し、知を融合する－21世紀型課題へのアプローチ」と題して講演が行われ、受講者からは「良くわかり、興味がある話を聞くことができた」、「研究者の熱心な取組みに関心した」との感想が寄せられた。

(宇治地区事務部)



公開講演会の講演風景

看護フェアを開催

医学部附属病院では、10月14日(土)に看護フェアを開催した。このフェアは、看護を学んでいる人を対象とし、看護の知識を深めることはもちろん、京大病院の看護の状況を知ることによって、将来、本院の看護師として活躍してもらうことを期待して企画されたものである。

当日は、リクルート服姿の看護学生や、看護師経験者等、約500人の参加があった。アトリウムホールを会場として、診療科部毎の仕事の内容を写真や資料を使って説明するパネル展示コーナー、体験を通して学ぶフィジカルアセスメントやBLS(Basic Life Support)講習等が好評であった。この他、一山 智副病院長の講演「感染管理の最前線」では、自分の存在によって人に喜んでもらえる仕事として、医療人の魅力をアピールし、また、嶋森好子看護部長の講演「新人看護師と医療安全」では、新人看護師の医療安全に対する考え方を通して本院の看護師の魅力について話をされた。ユニークなところでは、元虎ノ門病院看護部長の大江裕子さんによる講演「祇園の若女将と看護」に

参加者は真剣な表情と和やかな表情を織り交ぜて聴いていた。

このフェアに参加した看護学生からは、「看護の仕事について、より身近に感じることができるようになったと同時に、患者さんの命を預かるという職責の重さを実感した」という声が聞かれた。

(医学部附属病院)



パネル展示を見入る参加者

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座 「国際化と日本人のアイデンティティー分析心理学の視点から」を開催

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人の心の理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年度は、ユング派分析家のリース 滝 幸子センター客員助教授を講師として、10月21日(土)に、時計台記念館国際交流ホールⅢで行った。

講演では、急速に国際化が進む現代における日本人のアイデンティティのあり方について、文化差の多様性や個人と世界とのつながり、東洋と西洋の心性から見た日本人の個性化の過程などをテーマに、講師自身の経験を踏まえながら、具体的な例を交え分かりやすく取り上げられた。後半の質疑応答では、参加者から活発に質問や意見が出され、国際化をめぐる起こる様々な問題や課題を通して、現代の日本人の心の様相やあり方について会場全体で理解を深める場となった。

本講座は、毎年参加者からの好評を得ており、複

雑な心の問題を理解していく上で不可欠な、人間の存在自体を見つめ直すことに繋がるテーマが話し合われる貴重な機会となるよう、来年度以降も開催していくことを考えている。

(大学院教育学研究科)



リース 滝 幸子センター客員助教授の講演風景

「アトムサイエンスフェア2006」を開催

原子炉実験所では、10月21日(土)に「アトムサイエンスフェア2006」を開催した。このイベントは、小学生から一般の方まで、地域住民の方々に広く科学に興味を持ってもらうため、地元自治体(熊取町、泉佐野市、貝塚市)の教育委員会等の協力を得て、2002年度から継続して実施しており、今回で5回目となる。

今回は、昨年度までとは趣向を変えて、体験コーナー、展示コーナーと3つの実験コーナーを設けて、参加者は班ごとに分かれ、すべてのコーナーを体験することとした。当日は、定員を大きく上回る78人の参加があり、アトムから放射線の世界まで、それぞれのコーナーを楽しまれた。

特に、実験コーナーで行われた、鉄粉を混ぜたスライムに磁石を近づけると、スライムが磁石を包むように行動することを観察する磁性流体実験では、子供達がスライム作りから始め、スライムに磁石を近づけた時のスライムの奇妙な動きに面白がり、驚きの声を上げて楽しんでいた。また、霧箱実験や、

スチール缶の上でプラスチックコップが回る自然対流の実験では、真剣に取り組む参加者の姿が見られるなど、今回のフェアは例年にない盛り上がりを見せ、参加者は実験で作ったものをお土産に、皆さん一様に満足して帰路につかれた。

(原子炉実験所)



実験の説明に聞き入る参加者

訃報

このたび、^{もりひろよして}森広芳照情報学研究科教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

森広 芳照 情報学研究科教授



森広芳照先生は、9月29日逝去された。享年61。

先生は、昭和48年に東京工業大学電気工学専攻博士課程を修了後、日本電信電話公社（現NTT）に入社、NTT研究開発本部副本部長などを歴任の後、平成10年京都大学大学院情報学研究科教授に就任された。

先生のご専門は通信工学で、特に衛星通信システムの研究開発にすぐれた業績を上げられた。衛星回線と地上回線を組み合わせて、離島通信や災害時の迂回ネットワークを柔軟かつ経済的に実現できるDYANETの概念を提唱するとともに、通信衛星CS-3を用いて全国規模の商用ネットワークを実現

した。本業績により、平成4年電子情報通信学会業績賞、平成5年通信協会前島賞、平成7年科学技術功労者賞を授与されている。本学においては通信分野の教育・研究に尽力され、その個性は学生から慕われ、数多くの研究者・技術者を育成された。また、内閣府総合改革会議、次世代ネットワーク推進会議、関西経済同友会サイバー適塾講師、さまざまな企業との共同活動や講演などを通じて、社会と大学の接点としての活動に注力された。

先生は、電子情報通信学会理事・評議員、近畿次世代ネットワーク推進協議会副会長等を歴任され、通信分野の発展に尽力された。

（大学院情報学研究科）

日誌 2006.9.1 ～ 9.30

9月4日 役員会

5日 部局長会議、研究科長部会

〳 イタリア、Stefano Zanini 在大阪イタリア総領事館総領事 他2名、総長他と懇談

6日 21世紀COEフォーラム（7日まで）

8日 学生部委員会

〳 スウェーデン、Per Eriksson イノベーションシステム庁長官 他2名、総長他と懇談

12日 財務委員会

13日 IIOフェア

14日 平成18年度全学教育シンポジウム（15日まで）

19日 役員会

〳 教育研究評議会

〳 シニアキャンパス2006（22日まで）

20日 国際交流委員会

25日 博士学位授与式

〳 役員会

26日 総長外国出張（29日まで）

〳 財務委員会

27日 入学者選抜方法研究委員会

29日 大学入試センター試験実施委員会

30日 ジュニアキャンパス2006（10月1日まで）

お知らせ

湯川秀樹・朝永振一郎博士生誕百年関連展示 「一中・三高・京大 ―二人が学んだ学校―」

京都大学では、湯川秀樹・朝永振一郎博士の生誕百年を記念して様々な事業を行っています。

総合博物館においては、企画展「素粒子の世界を拓く」を開催中です。

大学文書館企画展示室においても、湯川・朝永生誕百年記念事業企画実施専門委員会の主催で「一中・三高・京大 ―二人が学んだ学校―」を開催しています。ぜひご覧ください。

1. 会 期：11月7日(火)～2007年1月28日(日)
2. 会 場：百周年時計台記念館1階 歴史展示室
開室時間：9：30～17：00 休館日：第1月曜日、12月28日～1月3日
3. 観 覧 料：入場無料
4. 問い合わせ先：京都大学大学文書館
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-2651 FAX：075-753-2025
E-mail：archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。
<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>

知的財産・産学官連携説明会

1. 日時・場所：宇治キャンパス…12月5日(火)午後1：15／3：00
共同研究棟(化学研究所)1階大セミナー室
桂キャンパス …12月8日(金)午後1：10／2：10／3：10
Aクラスター A1棟 地下1階 電気系講義室
2. 対 象：京都大学の研究者(主に理系の方)、職員、大学院生
3. プログラム：
～宇治キャンパス～
第1部 午後1：15～2：45
IIO(国際イノベーション機構)による知的財産権についての説明会
(1)大学での研究活動に係る知的財産トピックス
(2)共同研究や競争的研究資金の獲得、推進を行う上で注意すべきこと
第2部 午後3：00～5：00
JST(独立行政法人科学技術振興機構)制度・事業説明会
(1)JST 諸事業の説明
(2)研究成果活用プラザ京都事業内容の説明・コーディネータ紹介
(3)質疑・応答
交流会 午後5：10～ 宇治生協会館1階 会費1,000円(予定)

～桂キャンパス～

第1部 午後1:10～2:00(研究統括者, 事務職員向け)

- ・競争的研究資金の獲得…JST, NEDO の公募研究プログラム紹介
- ・共同研究に関する注意点

第2部 午後2:10～3:00(若手研究者, 大学院生向け)

- ・研究活動と知的財産…特許調査の仕方, 研究ノートの活用, ベンチャー起業など

第3部 午後3:10～4:00

- ・特許制度の概説…学会発表と特許法30条, 優先権主張, 外国出願など

※事前申込は不要 3部構成のいずれにお越しいただいても結構です。

(宇治地区説明会の交流会にご参加される場合は, 事前に宇治3354までお申し込み下さい。)

4. 問い合わせ先: 京都大学国際イノベーション機構 知的財産部(担当: 松尾)

TEL: 075-753-9181 FAX: 075-753-7591

E-mail: ip-office@iio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.ip.kyoto-u.ac.jp/>

主 催: 京都大学国際イノベーション機構(宇治キャンパスでの説明会は, 科学技術振興機構との共催)

※吉田キャンパスでの説明会は11月21日(火)に終了しました。

能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として, 日本伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれましては, 是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

1. 日 時: 12月14日(木) 開場: 17:30
開演: 18:30 (開演後の入場はご遠慮願います。)
終演: 20:30(予定)
2. 会 場: 京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44 TEL: 075-771-6114
(東山仁王門を東へ約300メートル)
3. 演 目: 狂 言 ^{カマ}鎌 ^{ハラ}腹 茂 山 千五郎
茂 山 宗 彦 他
能 楽 ^{ノノ}野 ^{ミヤ}宮 片 山 九郎右衛門
片 山 清 司
宝 生 欣 哉 他

備 考 1. 入場無料(入場の際は, 学生証又は職員証を提示してください。)

2. プログラムは当日に会場で配付します。

3. 定員は550人, 当日先着順とします。

4. 問い合わせ先: 学生部学生課学生企画グループ

TEL: 075-753-2504・2588

(学生部)

化学研究所 第106回研究発表会

1. 日 時：12月15日(金) 10:00~17:50
 2. 場 所：京都大学化学研究所 共同研究棟
 3. プログラム：

挨拶

所 長 江崎 信芳

有機ビスマス化合物を用いたリビングラジカル重合の開発

山子 茂

アルギニンペプチドの糖鎖認識と細胞による効率的な取り込み

中瀬 生彦

京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞 授与式

京大化研奨励賞 受賞講演

京大化研学生研究賞 受賞講演

ーポスターセッション(13:10~14:50) 61件ー [於 共同研究棟 ライトコート]

「化研らしい融合的・開拓的研究」発表

・磁性ナノ微粒子を介したスピン依存伝導

小林 研介

・ケイ素鎖を介する電子移動におよぼす分子構造・分子運動の影響評価とその制御法の確立

辻 勇人

・カーボンナノチューブを利用した有機スピントロニクスデバイス創成の試み

松田 一成

・有機物固有の問題に着目した有機半導体デバイスの基礎研究

吉田 弘幸

・バイオインフォマティクスとバイオケミストリーの連係による23番目のアミノ酸の探索

三原 久明

フェムト秒レーザーによる CNT 電極表面のナノアブレーション

橋田 昌樹

シトクロム P450 の多様性と植物の化学進化

水谷 正治

4. 参 加 費：無 料(申込不要)
 5. 問い合わせ先：京都大学化学研究所担当事務室

E-mail: koho@scl.kyoto-u.ac.jp FAX: 0774-38-3014

詳細は化学研究所ホームページをご覧ください。

http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/event/rp2006_106.html

編集後記

大学の活動の一つに積極的な社会貢献があり、産学連携や知の活用等その取り組みは多様といえます。

広報では、大学の情報を正確、迅速かつ分かりやすく発信することを心掛けていますが、社会貢献の多様化に伴って、発信する情報の増加と変化のめまぐるしさに追われ、広報はますます多忙となっています。

皆様におかれましては、忘年会・新年会シーズンを控え、飲酒運転の撲滅はもとより、会食の場における言動には十分ご注意ください。

広報に関するご意見は、E-mail: kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp にお寄せください。

